

五 蔵 遺 跡 2

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 29 年 3 月

茨 城 県 教 育 委 員 会
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第423集

五^ご蔵^{ぞう}遺跡 2

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 29 年 3 月

茨 城 県 教 育 委 員 会
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業に伴う五蔵遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代と古墳時代の遺構を確認することができました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県教育委員会財務課に厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、御指導、御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 野口 通

例 言

- 1 本書は、茨城県教育委員会財務課の委託を受け、公益財団法人茨城県教育財団が平成26年度に発掘調査を実施した、茨城県土浦市大岩田1,599番に所在する五藏遺跡ごそうの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成27年1月5日～1月31日
整理 平成28年7月1日～8月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 寺内 久水
次席調査員 舟橋 理
調査員 根本 康弘
- 4 整理及び本書の編集・執筆は、整理課長後藤一成のもと、調査員根本康弘が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X = + 6,200 \text{ m}$ 、 $Y = + 34,160 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 赤彩  縦線土器断面

●土器 ○土製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は()を、推定値は[]を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 遺構の主軸は、長軸(径)とみなした。「主軸・長軸(径)方向」は、主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N - 10° - E)。

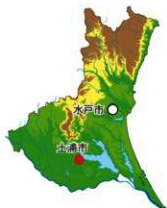
目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
五蔵遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
陥し穴	12
2 古墳時代の遺構と遺物	14
(1) 土坑	14
(2) 溝跡	15
3 その他の遺構と遺物	18
(1) 土坑	18
(2) 遺構外出土遺物	19
第4節 まとめ	20
写真図版	PL 1～PL 4
抄 録	

五蔵遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

五蔵遺跡は、茨城県土浦市大岩田1,599番に所在し、東側に霞ヶ浦を望む標高22mほどの台地上に立地しています。茨城県立土浦第三高等学校の老朽校舎改築事業にともない、遺跡の内容を記録保存するために、茨城県教育財団が平成26年度に330㎡について発掘調査を行いました。



調査の内容

調査の結果、縄文時代の陥し穴3基、古墳時代の土坑1基と古墳の周溝の可能性のある溝跡1条、時期が明確でない土坑2基が確認できました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高坏・壺・甕）、須恵器（坏）、土製品（土玉・管状土錘）、瓦です。



遺跡調査区全景（北から）



縄文時代の陥し穴



古墳の周溝の可能性ある溝跡



土坑から出土した土器



溝跡の土層

調査の成果

平成 23 年度の調査でも 3 基の陥し穴が確認されており、縄文時代には狩猟の場として盛んに利用されていたことが分かりました。

古墳時代には、当遺跡周辺に多くの古墳が造られていました。平成 23 年度の調査でも 3 基の古墳が確認されているので、今回の調査で確認された土坑や溝跡は、古墳との関連性が考えられ、特に溝跡は古墳の周溝の可能性あります。

太平洋戦争時には、海軍の施設が造られていました。その建物に葺かれていたと見られる瓦が、たくさん出土しています。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、教育施設の充実のため、耐震強化等を含めた校舎の改築を計画的かつ迅速に進めている。

平成25年8月20日、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）に対して、県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成26年2月7日に現地踏査を、平成26年2月18日に試掘調査を実施して遺跡の所在を確認した。平成26年2月21日、茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）あてに、事業地内に五蔵遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成26年4月8日、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）は茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）に対して、文化財保護法第94条に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）は、五蔵遺跡の現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成26年4月22日に、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成26年11月19日、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）あてに、県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成26年11月19日、茨城県教育委員会教育長（文化課扱い）は茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）あてに、五蔵遺跡の発掘調査範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会教育長（財務課扱い）から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、五蔵遺跡の発掘調査を平成27年1月5日から1月31日まで実施した。

第2節 調査経過

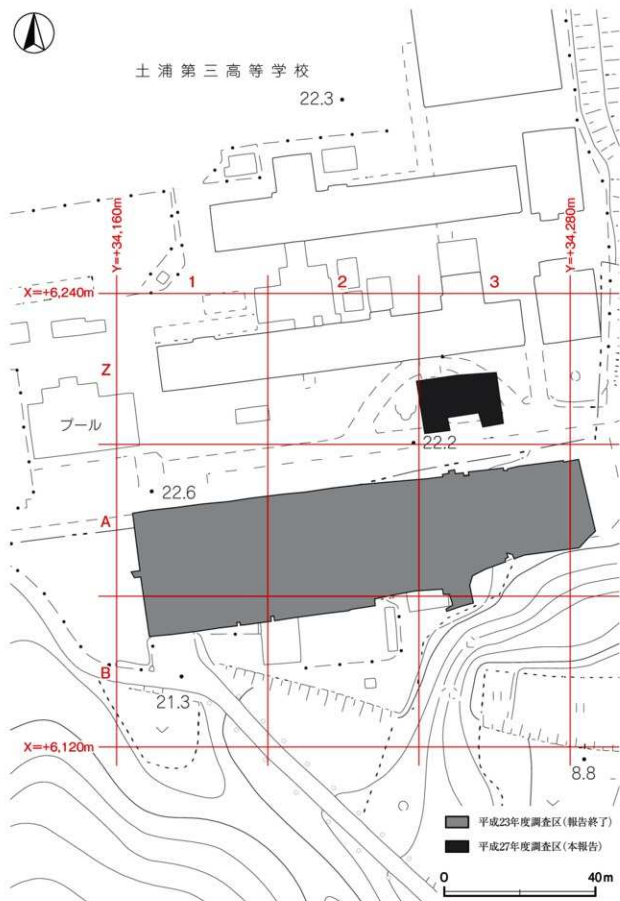
五蔵遺跡の調査は、平成27年1月5日から1月31日までの1か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工 程	期 間	1 月			
		5	10	15	20
調査準備 遺構除根	確認	■			
遺構調査		■			
遺物洗浄 写真整理	浄記	■			
撤 収		■			



土浦第三高等学校

22.3



第1図 五蔵遺跡調査区設定図(土浦市・阿見町都市計画図2,500分の1)

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

五蔵遺跡は、茨城県土浦市大岩田1,599番の県立土浦第三高等学校の敷地内に所在している。土浦市は、茨城県南部の中央に位置しており、東は霞ヶ浦とかすみがうら市、北は石岡市、西はつくば市、南は阿見町と境を接している。五蔵遺跡の一部は阿見町の北端部まで広がっており、平成23年度の調査区域の大半は阿見町域に含まれている。

市域は、北部は新治台地、南部は筑波・稲敷台地が広がっている。二つの台地は桜川の低地によって区切られ、ともに北西から南東へ次第に台地面の標高を減じている。地質は、新治台地（天の川以南）では基盤である成田層の上に雑混じりの砂層、火山灰質シルト層、関東ローム層が¹⁾、筑波・稲敷台地では、基盤の成田層の上に竜ヶ崎砂礫層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層が堆積している²⁾。

当遺跡が所在する筑波・稲敷台地の北東縁部は、花室川によって形成された低地と、桜川沿いの低地とに挟まれた標高22mほどの細長い台地で、その先端部に立地している。遺跡付近の台地周囲は急峻な崖状の地形となっており、霞ヶ浦沿岸の低地に至っている。台地と低地との比高は約20mである。

第2節 歴史的環境

桜川と花室川に挟まれた台地周辺には、多くの遺跡が所在している。特に、霞ヶ浦に面する台地縁部には、古墳や城館跡等が数多く立地している³⁾。

旧石器時代では、花室川左岸の台地上の内出後遺跡〈25〉がある⁴⁾。また、花室川流域はナウマンゾウの化石が発見されることで知られている。

縄文時代の遺跡や貝塚も多く、霞ヶ浦や桜川・花室川沿岸の台地上に分布している。花室川右岸に位置する烏山貝塚〈70〉は関山式期、桜川右岸の小松遺跡〈37〉は中・後期の貝塚である⁵⁾。また、近在する上高津貝塚は、後・晩期の貝塚として名高く、国指定史跡となっている。花室川右岸の烏山遺跡〈74〉からは前期の関山式期の堅穴建物跡が検出されており⁶⁾、中期では、桜川と花室川に挟まれた台地中央の六十原遺跡〈32〉・六十原A遺跡〈33〉が調査されている⁷⁾。

弥生時代の遺跡は少なく、烏山遺跡では後期後半の堅穴建物跡が確認されている。

古墳時代の遺跡数は増加し、台地奥にも確認されるようになる。前期の集落跡には、前述の内出後遺跡や烏山遺跡⁸⁾、烏山遺跡と同じ台地奥の南丘遺跡〈73〉等がある。中期から後期にかけて、遺跡数はさらに増加している。烏山遺跡・内出後遺跡、花室川左岸の神出遺跡〈22〉等で、中期から後期にかけての集落跡が確認されている⁹⁾。また、石製模造品が多く出土するのも当地域の特徴で、阿見町側の宮脇遺跡〈49〉・阿見東遺跡〈50〉から滑石製の勾玉・剣型品・管玉・白玉が出土している¹⁰⁾。古墳は小丘陵上に築造されている。桜ヶ丘古墳〈28〉は桜川と花室川に挟まれた台地中央部に位置しており、工事中に箱式石棺が確認されている。桜川右岸の高津天神山古墳群〈39〉では人物埴輪が出土している。当遺跡からは、須志器坏・蓋・甕・提瓶等が出土したと伝えられており、「土浦市史」では「五蔵古墳」としている¹¹⁾。

当遺跡周辺は古代の信太郡に属し、筑波郡・河内郡との境にあたる中家郷に比定されている。奈良・平安時

代の遺跡も多く、台地奥にまで確認されている。烏山遺跡では「大家」と書かれた黒土器や線刻のある紡錘車が出土したほか、多数の掘立柱建物跡が検出されており、拠点集落の様相を見せている¹²⁾。同じ台地の奥には、灰釉陶器が出土した長峰遺跡¹³⁾や南丘遺跡・神出遺跡等がある。

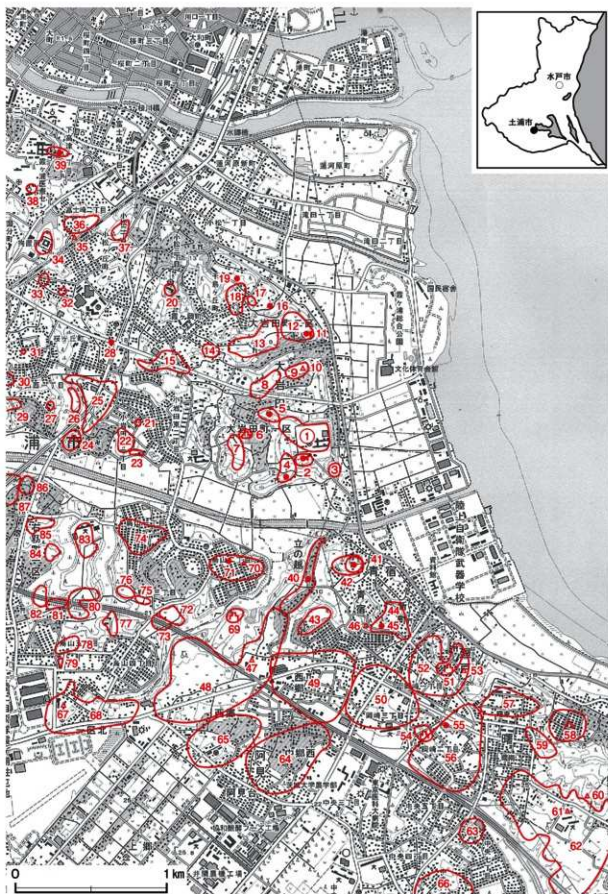
中世には、台地縁辺部の複雑な地形を利用して多くの城館が築かれている。花室川左岸の岩田館跡(6)は、岩田彦六が築造したとされている¹⁴⁾。神出遺跡からは掘立柱建物跡や地下式坑が検出され、内出後遺跡からは青磁平碗が出土している。大岩田貝塚(10)には、中世の遺物が散布していることから、近隣に中世の館跡等が存在すると推定されている¹⁵⁾。また、内出後遺跡からは近世墓が検出されている。

当遺跡の場所には、太平洋戦争中の昭和18年に海軍航空要員研究所(適正部)が建てられた。平成23年度の調査では、それに伴う地下壕等の遺構・遺物が確認されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び表1の当該番号と同じである。なお、本章は、既刊の『茨城県教育財団文化財調査報告』第381集を改編したものである。

註

- 1) 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 土浦」茨城県 1983年12月
- 2) 蜂須紀夫編『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1977年8月
- 3) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 4) 窪田恵一「第7回企画展 土浦の旧石器」上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001年10月
- 5) 土浦市史編さん委員会「土浦市史」土浦市史刊行会 1975年11月
- 6) 大川清ほか「茨城県土浦市 烏山遺跡」土浦市教育委員会 1988年3月
- 7) 肥田順一「六十原A遺跡」土浦市教育委員会 1996年6月
大岡淳志ほか「六十原遺跡」土浦市教育委員会 2003年11月
- 8) 註6に同じ
- 9) 土生朗治ほか「東出・神出・中居遺跡」土浦市教育委員会 1999年10月
- 10) 阿見東遺跡調査会編『阿見東遺跡第1地点調査報告書』阿見町教育委員会 1992年5月
日考研茨城編『宮協遺跡第6次発掘調査報告書』阿見町教育委員会 2008年7月
- 11) 註5に同じ
- 12) 註6に同じ
- 13) 根本康弘「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第64集 1991年3月
- 14) 註5に同じ
- 15) 註3に同じ



第2図 五蔵遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「土浦」)

表1 五蔵遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	五蔵遺跡		○	○	○	○		23	中居遺跡					○	○	
2	丸山古墳群				○			24	南古屋敷館跡						○	
3	丸山下遺跡				○			25	内出後遺跡	○	○		○	○	○	
4	法泉寺古墳群				○			26	橋下遺跡				○	○	○	
5	中内山古墳群	○			○	○		27	谷畑遺跡		○		○			
6	岩田館跡						○	28	桜ヶ丘古墳				○			
7	西の前遺跡				○	○	○	29	いさろ遺跡				○	○		
8	木曾遺跡				○	○		30	油麦田遺跡				○	○		
9	木曾北遺跡				○	○	○	31	桜ヶ丘遺跡				○			
10	大岩田貝塚						○	32	六十原遺跡		○					
11	ひさご塚古墳				○			33	六十原A遺跡	○	○					
12	内根A遺跡	○	○	○	○			34	国分遺跡		○					
13	内根B遺跡	○		○	○			35	小松貝塚		○					
14	内根C遺跡				○			36	池の台遺跡	○	○		○	○		
15	霞ヶ岡遺跡	○			○	○	○	37	小松遺跡				○	○		
16	霞ヶ岡古墳				○			38	大久保遺跡				○			
17	霞ヶ岡北遺跡	○			○	○		39	高津天神山古墳群				○			
18	東谷遺跡	○		○				40	立の越古墳群				○			
19	三芳古墳				○			41	青宿古墳群				○			
20	房谷遺跡				○			42	後久保遺跡				○			
21	東出遺跡				○	○	○	43	熊野脇遺跡		○		○			
22	神出遺跡	○			○	○	○	44	空地台遺跡		○		○			

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
45	ビクラ塚古墳				○			67	一区北貝塚	○						
46	青宿貝塚	○						68	一区北遺跡	○						
47	阿見貝塚	○		○				69	立の越館跡						○	
48	西郷遺跡	○		○	○			70	烏山貝塚	○						
49	宮脇遺跡			○	○	○	○	71	石倉山古墳群				○			
50	阿見東遺跡				○			72	堂後遺跡	○		○	○			
51	廻戸城跡						○	73	南丘遺跡	○		○	○	○	○	○
52	廻戸遺跡	○	○	○			○	74	烏山遺跡	○	○	○	○			
53	廻戸貝塚	○						75	北平北遺跡					○		
54	岡崎城跡						○	76	北平南遺跡	○				○		
55	岡崎古墳						○	77	小西遺跡	○				○		
56	岡崎遺跡				○			78	烏山A遺跡					○		
57	曙町営住宅遺跡	○			○			79	烏山B遺跡					○		
58	大室城跡				○		○	80	長峰遺跡	○				○		
59	南谷津遺跡	○						81	数光遺跡	○				○	○	
60	根田貝塚 (竹来貝塚)	○	○	○	○	○	○	82	宮塚遺跡						○	○
61	入屋敷貝塚	○					○	83	永峰遺跡			○	○			
62	竹来遺跡	○	○	○	○	○	○	84	松原遺跡	○				○		
63	外降木遺跡					○		85	堂地塚遺跡	○			○	○	○	
64	中郷東遺跡					○		86	沖の台遺跡					○	○	
65	中郷遺跡				○			87	平坪遺跡	○				○	○	○
66	降木遺跡	○														



X=+6.224m Y=+34.240m
Z3e1

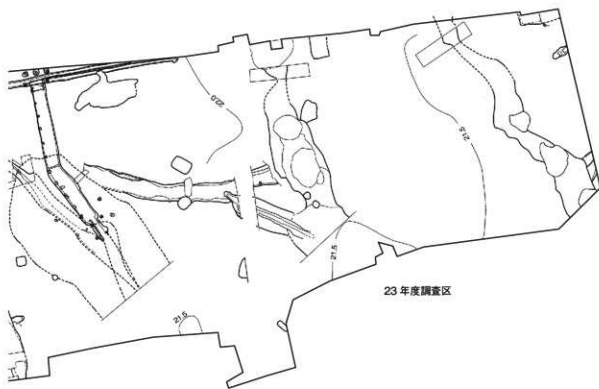
X=+6.224m Y=+34.280m
Z4e1



27年度調査区

+A3a1

+A4a1



23年度調査区

X=+6.148m Y=+34.240m
B3d1

0 20m

第3図 五蔵遺跡遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

五蔵遺跡は、土浦市の南東端部に位置しており、霞ヶ浦西岸沿いの低地を望む標高約22mの台地上に立地している。遺跡の範囲は、東西約300m、南北約180mで、平成23年度の調査では、縄文時代の陥し穴、古墳、戦争関連遺構等が確認されている。

今回の調査面積は、330㎡である。確認された遺構は、縄文時代の陥し穴3基、古墳時代の土坑1基及び溝跡1条、時期不明の土坑2基である。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)で5箱出土している。主な出土遺物は、縄文時代では縄文土器(深鉢)、古墳時代では土師器(坏・高坏・壺・甕)、須恵器(坏)、土製品(土玉・管状土錘)である。

第2節 基本層序

調査区北部のZ3f2区にテストピットを設定した。

第1層は後世に整地された土層である。整地の時期は、校舎建設時と考えられる。褐色を呈し、ロームブロック中量のほか礫や瓦片を含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は20～35cmである。

第2層も後世に整地された土層である。褐色を呈し、ローム粒子多量と炭化物中量、礫を含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は約20cmである。

第3層は褐色のハードローム層である。微量の黄色粒子を含んでおり、粘性・締まりはともに強い。層厚は25～46cmである。

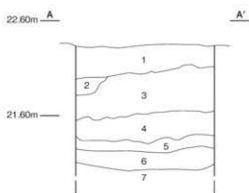
第4層は褐色のハードローム層である。粘性・締まりはともに強い。層厚は16～30cmである。

第5層は黄褐色のハードローム層である。粘性・締まりはともに強い。層厚は10～16cmである。

第6層はにぶい黄褐色のハードローム層である。粘土層への漸移層で、粘土粒子を少量含んでいる。粘性は極めて強く、締まりは普通である。層厚は15～25cmである。

第7層はにぶい黄褐色の粘土層である。粘性は極めて強く、締まりは普通である。常総粘土層に相当する。層厚は10cmまで確認したが、それ以下は未掘のため不明である。

なお、遺構は第3層上面で確認した。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴3基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

陥し穴

第31号土坑（第5図，PL 1）

位置 調査区西部のZ 3i1区，標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 平面形は長径2.11m，短径0.53mの長楕円形で，長径方向はN-26°-Wである。深さは98cmで，壁はほぼ直立している。長径方向の壁は，底面からやや内増しながら立ち上がっている。底面は北側に向かってわずかに傾斜している。

覆土 4層に分層できる。暗褐色土・褐色土がレンズ状に堆積していることから，自然堆積である。

土層解説

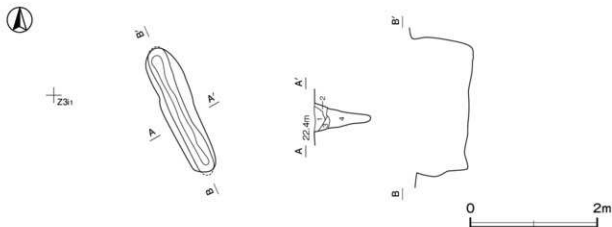
1 暗褐色土 ロームブロック少量，炭化物微量

3 暗褐色土 ロームブロック中量，炭化粒子微量

2 褐色土 ローム粒子中量

4 暗褐色土 ローム粒子多量

所見 時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。



第5図 第31号土坑実測図

第33号土坑（第6図，PL 1）

位置 調査区西部のZ 3h2区，標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 平面形は長軸2.07m，短軸0.52mの長方形で，長軸方向はN-39°-Wである。深さは88cmで，壁は直立している。底面は平坦で，北側が5cmほど浅くなる。

覆土 4層に分層できる。暗褐色土・褐色土がレンズ状に堆積していることから，自然堆積である。

土層解説

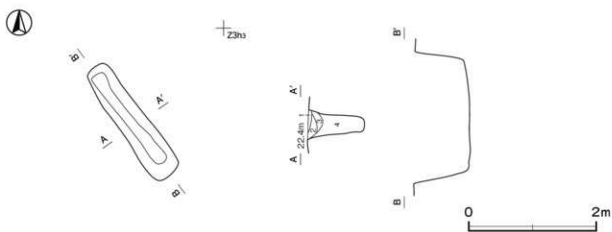
1 暗褐色土 ローム粒子少量，炭化物微量

3 暗褐色土 ロームブロック少量

2 褐色土 ロームブロック中量，炭化粒子微量

4 暗褐色土 ローム粒子多量

所見 時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。



第6図 第33号土坑実測図

第34号土坑 (第7図, PL 2)

位置 調査区中央部のZ3g3区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第18号溝に掘り込まれている。

規模と形状 平面形は長径1.90m、短径0.29mの長楕円形で、長径方向はN-32°-Wである。深さは102cmで、壁はほぼ直立している。底面は狭く、北に向かってわずかに傾斜している。

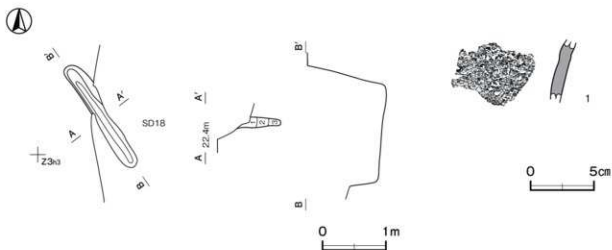
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
2 暗褐色 ロームブロック中量
3 極暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期中葉と考えられる。



第7図 第34号土坑・出土遺物実測図

第34号土坑出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・岩屑・繊維	明赤褐色	普通	無文 ナデ調整	覆土中	

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
31	Z 311	N-20°-W	長楕円形	2.11 × 0.53	98	緩斜	ほぼ直立	自然	-	
33	Z 312	N-30°-W	長方形	2.07 × 0.52	88	平坦	直立	自然	-	
34	Z 313	N-32°-W	[長楕円形]	(1.90) × 0.29	102	緩斜	直立	自然	縄文土器	本誌→S08

2 古墳時代の遺構と遺物

当該時代の遺構は、土坑1基と溝跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

第32号土坑 (第8図, PL 2)

位置 調査区西部のZ 311区, 標高22mほどの台地縁部に位置している。

規模と形状 平面形は長径0.65m, 短径0.60mの円形である。深さは42cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。第1・3層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

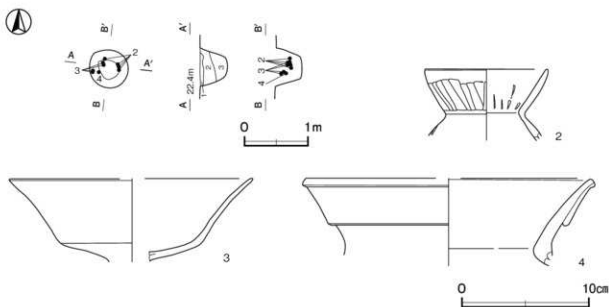
1 褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片95点(埴9, 高坏27, 椀25, 壺8, 甕26)が、覆土中層から投棄された状態で出土している。

所見 本跡は、廃棄土坑である。時期は、出土土器から5世紀後半と考えられる。



第8図 第32号土坑・出土遺物実測図

第 32 号土坑出土遺物観察表 (第 8 図)

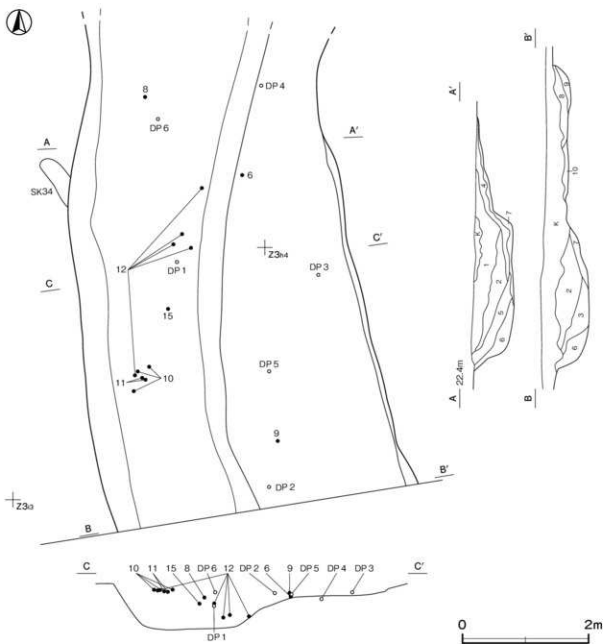
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	埴	97	(56)	-	長石・石英・ 雲母	橙	普通	口縁部外面截位のへら磨き 内面横位のへらナデ	覆土中層	30% PL. 4
3	土師器	高杯	[19.1]	(6.5)	-	長石・石英・ 雲母	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中層	30% PL. 4
4	土師器	壺	[22.4]	(6.8)	-	長石・石英・ 雲母	明赤褐	普通	外・内面ヨコナデ	覆土中層	20% PL. 4

(2) 溝跡

第 18 号溝跡 (第 9～11 図, PL 3)

位置 調査区中央部の Z 3 g3～Z 3 i3 区, 標高 22 m ほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第 34・35・36 号土坑を掘り込んでいる。



第 9 図 第 18 号溝跡実測図

規模と形状 南部は調査区域外に延びており、北部は擾乱を受けているため、確認した長さは8.04mである。方向は、南端部がN-10°-W、北端部がN-9°-Eで、弧状を呈している。南部は上幅4.82m、下幅1.55m、北部は上幅3.85m、下幅2.33mである。壁は、西側では55~60度の角度で外傾しており、高さは50~71cmである。東側では、30~40度の角度で外傾しており、高さ20~30cmからさらになだらかになっている。溝底は平坦である。

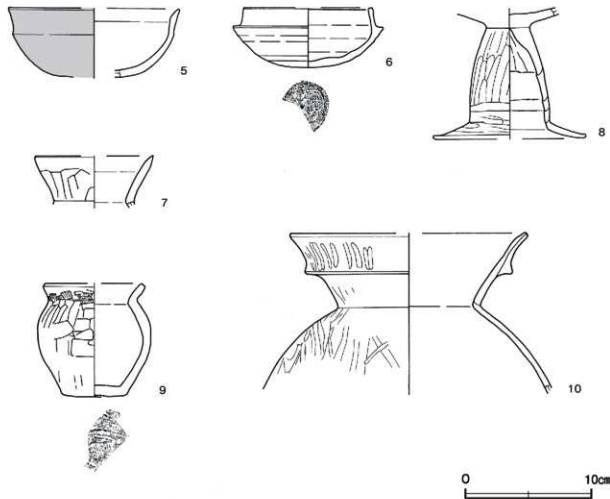
覆土 10層に分層できる。西側から流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

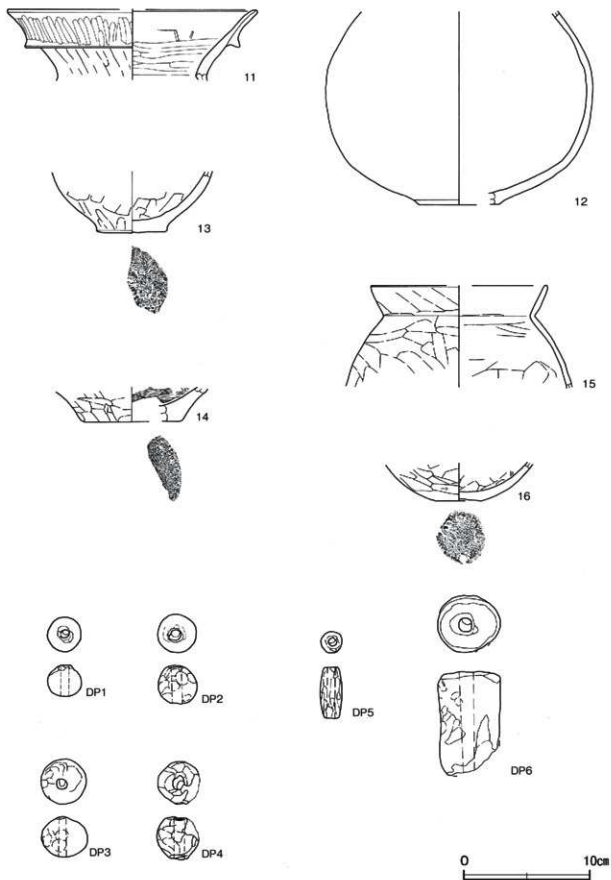
- | | | | |
|--------|----------------|--------|----------------|
| 1 無暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量 |
| 3 無暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 8 無暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 土器器片732点（坏40、埴26、高坏88、壺242、甕336）、須恵器1点（坏）、土製品6点（土玉4、管状土錘2）のほか、縄文土器片10点（深鉢）、弥生土器片27点（広口壺）が出土している。9は南部の覆土下層から、6は北部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の性格は不明であるが、規模や形状から排水・区画・防衛等を目的としたものとは考えにくく、古墳の周溝の可能性がある。時期は、出土土器から5世紀後半と考えられる。



第10図 第18号溝跡出土遺物実測図（1）



第11图 第18号沟迹出土遗物实测图(2)

第18号溝跡出土遺物観察表(第10・11図)

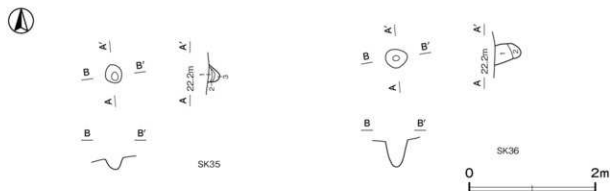
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土師器	坏	[13.5]	[5.5]	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 体部ヘラ削り残ナデ 外面未至 内面黒色処理	覆土中	20%
6	須恵器	坏	[10.2]	4.8	-	長石・石英	灰	普通	外・内面ロクロナデ 底部左回りの回転ヘラ削り	覆土下層	30% TRG = 産地不明 PL 4
7	土師器	埴	[9.4]	[4.2]	-	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部上位外・内面横ナデ 下位縦位のヘラ書き	覆土中	10%
8	土師器	高坏	-	[10.4]	[11.9]	長石・石英	にぶい橙	普通	胴上縁をき上げ 脚部上位縦位のヘラ書き 下位縦位のヘラ書き	覆土中層	50% PL 4
9	土師器	小形埴	[7.5]	9.0	5.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部多方向のヘラ削りくびれ部にハケ目 内面ナデ	覆土下層	60% PL 4
10	土師器	壺	[18.6]	[12.7]	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面縦位のヘラ書き 内面横位のヘラナデ 体部外面多方向のヘラ書き 内面ヘラ削り 後継い模位のヘラナデ	覆土上層	30% PL 4
11	土師器	壺	[19.8]	[5.6]	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面縦位のヘラ書き 胴部斜位のナデ 内面横位のヘラナデ	覆土上層	10%
12	土師器	壺	-	[15.3]	6.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面中位ハケ目調整後ナデ 下位及び内面ナデ	覆土上層～下層	20% PL 4
13	土師器	壺	-	[4.8]	[5.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外・内面ヘラナデ	覆土中	10%
14	土師器	壺	-	[2.7]	[7.8]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラナデ 内面ハケ目調整後中央にナデ	覆土中	10%
15	土師器	甕	[13.6]	[8.1]	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	外・内面ヘラナデ	覆土中層	10%
16	土師器	甕	-	[3.0]	3.5	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ ヘラ削りで底部を造る	覆土中	10%

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	2.8	2.0	0.7	(17.0)	長石・石英	極暗赤褐	全面ナデ	覆土中層	PL 4
DP 2	土玉	3.1	3.0	0.8	28.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	指頭で整形	覆土中層	PL 4
DP 3	土玉	3.6	3.2	0.5~0.7	38.7	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤褐	ナデと指頭で整形	覆土下層	PL 4
DP 4	土玉	3.4	3.4	0.5~0.9	(32.4)	長石・石英	灰赤	指頭で整形	覆土下層	PL 4
DP 5	管状土師	1.7	4.1	0.6~0.7	(11.9)	長石・石英・雲母	明赤褐	全面ナデ	覆土下層	PL 4
DP 6	管状土師	5.0	(8.2)	0.9~1.1	(206.5)	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤褐	全面ナデ	覆土上層	PL 4

3 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

時期や性格が明確でない土坑2基を確認した。以下、実測図(第12図)及び一覧表を掲載する。



第12図 その他の土坑実測図

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第36号土坑土層解説

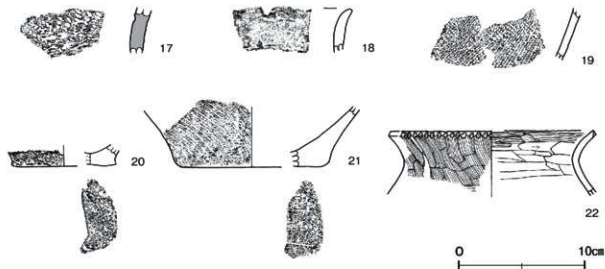
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

表3 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
35	Z 3 h3	N-10°-W	楕円形	0.31 × 0.27	20	皿状	ほぼ直立	自然	-	本誌→SD18
36	Z 3 h4	N-81°-E	楕円形	0.36 × 0.31	44	皿状	ほぼ直立	自然	-	本誌→SD18

(2) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図（第13図）と観察表で掲載する。



第13図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第13図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	晩成	手法の特徴ほか	出土位置	備 考
17	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・ 繊維	にぶい橙	普通	細い単節縄文RL	SD18	
18	弥生土器	鉢	-	-	-	長石・石英・ 雲母	橙	普通	外面無文 口唇内側に指頭をあてて液状口縁を 流す	SD18	
19	弥生土器	壺	-	-	-	長石・石英	橙	普通	附加糸一種（付加2条）	SD18	
20	弥生土器	壺	-	(1.7)	[8.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	細い原体の単節縄文RL	SD18	10%
21	弥生土器	壺	-	(4.8)	[11.4]	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	附加糸一種（付加2条）	SD18	10%
22	土師器	甕 [160]	(5.1)	-	-	長石・石英・ 雲母	黒褐色	普通	外面ハケ目 口縁部内面横位のハケ目 肩部内 面横位へラ痕等 口唇外面に等間隔の刺突	SD18	10%

第4節 ま と め

1 はじめに

当遺跡は、平成23年度に発掘調査が行われ、その成果は当財団報告書「第381集」に収録されている¹⁾。その内容は、遺構と遺物について詳細な分析がなされており、今回の調査成果に通じる点もある。そこで、今回の調査で確認した縄文時代の陥し穴と古墳時代の溝跡について、前回の成果を踏まえて若干の考察を加えてまとめたい。

2 縄文時代（陥し穴について）

3基の陥し穴は、わずかに方向を変えながら並んで掘り込まれている。いずれも同じ時期に掘り込まれたと考えられる。前回の調査でも3基の陥し穴が確認されている。時期は明らかではないが、今回確認された陥し穴と同様に、わずかに方向を変えながら並んで掘り込まれている。やはり、同時期に掘り込まれたと考えられる。台地周囲の等高線を見ると、これらの陥し穴は台地上の平坦面または緩斜面に掘り込まれており、長径方向は等高線と直交し、並び方は等高線の方向と平行または平行に近いと考えられる。

陥し穴の類例は多いので、笠間市石山神遺跡を例に考えてみたい。石山神遺跡では早期を中心とする陥し穴28基が確認されている²⁾。いずれも尾根の上面または緩斜面に掘り込まれており、2～3基が並んでいる例もある。等高線と長径方向や並び方との関係においても、当遺跡の二つの例と共通している点が認められる。時期は違っても、両遺跡で狩猟の対象とされた動物が同じであれば、その動物の行動のパターンには大きな違いはないと思われるので、陥し穴による狩猟の方法も共通性を有していると考えられる。この方法がそれぞれ独自に開発されたものなのか、他地域から伝播してきたものが受け継がれてきたものなのかは不明であるが、時間的に隔たり距離的にも離れている両遺跡に、陥し穴という例だけではあるが、狩猟の方法の共通性を見出すことができる。

3 古墳時代（第18号溝跡の性格について）

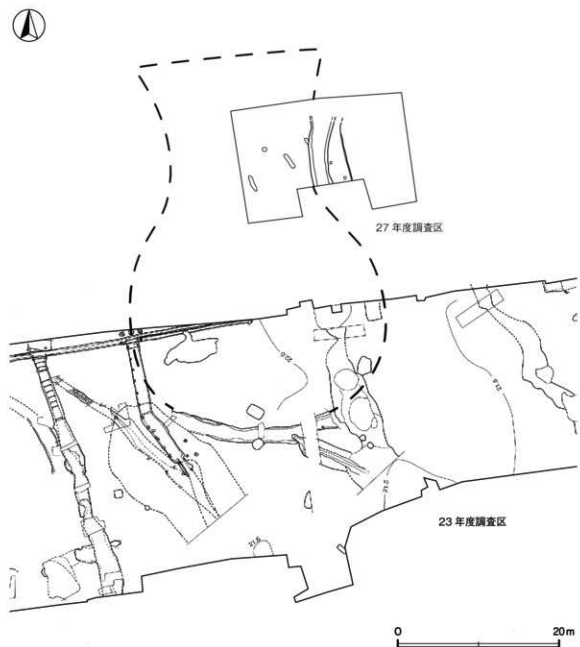
第18号溝跡の土層を見ると、西側からの流れ込みが多く、しかもその層中に中量のローム粒子が含まれている。単純な考えであるが、溝を掘ることによって生じたローム等の土砂が西側に高く盛り上げられていたと考えられる。断定はできないが、この溝跡が掘り込まれた時代に、このような規模の溝を掘って土砂を盛り上げる行為から連想されるのは古墳の築造ではないだろうか。つまり、第18号溝跡は、墳丘を削平された古墳の周溝である可能性がある。平面形が弧状を呈しているので、東側に墳丘がある円墳と考えようであるが、墳丘が築かれたと想定されるのは反対側の西側である。このような平面形状から墳形を考えると、前方後円墳のくびれ部が該当するようである。

平成23年度の遺構全体図と今回の遺構全体図を併せて見ると、第18号溝跡の南々西側30mほどの位置に第2号墳の周溝が確認されている。覆土は双方とも自然堆積であり、第18号溝跡と第2号墳の間には古墳の周溝と見られる遺構は確認されていない。これらのことから重複関係を考えると、第18号溝跡の南部が平成23年度の調査区域に達していないか、または第2号墳と第18号溝跡が同一遺構であるかのいずれかである。第2号墳は埴輪が出土しておらず、この点は第18号溝跡と同じである。また、時期は古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初）とされている。時期が近接しており、第2号墳の築造から長い年

月を経ずに墳丘を破壊して新たな古墳を築造することは考え難いので、第18号溝跡は第2号墳の一部であると考える方がよさそうである。

第18号溝跡を前方後円墳のくびれ部と考えた場合、平成23年度に調査された第2号墳は円墳とされているので、そちら側を後円部と考えた方が適切である。そこで、下図のように南側を後円部、北側を前方部とする前方後円墳を想定してみた。

以上、第18号溝跡の性格に関して、古墳の周溝である可能性について考えを述べてきたが、これはあくまでも推定に推定を重ねた結果であり、断定することはできないのは無論である。この点は疑問点として残さざるを得ない。



第14図 前方後円墳想定図

4 おわりに

調査は遺跡全体のごく一部分に過ぎず、確認した遺構や出土遺物も少なかった。そのため、明らかにできたことも少なく、とりわけ第18号溝跡の性格を推定でしか述べられず、疑問点として残さざるを得なかったのは残念である。

今後、平成23年度調査区の周囲や平成27年度調査区との間が調査される機会があれば、残された疑問点も解決できると思われるので、その点に期待したい。

註

- 1) 石丸敦史「五蔵遺跡 県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第381集 2013年3月
- 2) 上野修生「茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書 石山神遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第62集 1990年9月

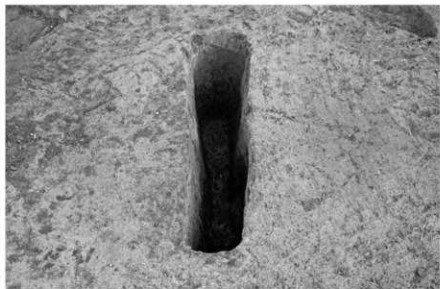
写 真 图 版



調査区全景

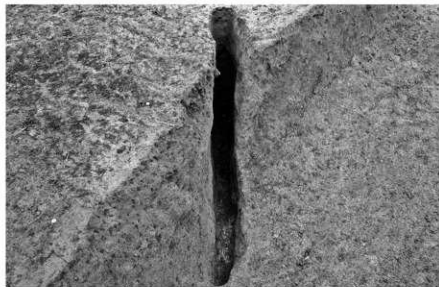


第 31 号 土 坑



第 33 号 土 坑

PL2



第 34 号 土 坑



第 32 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 32 号 土 坑



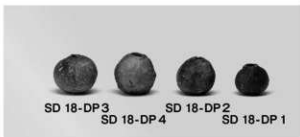
第 18 号 溝 跡
土 層 断 面



第 18 号 溝 跡
遺 物 出 土 状 況



第 18 号 溝 跡



抄 録

ふりがな	ござういせき2								
書名	五蔵遺跡2								
副書名	県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業地内埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第423集								
著者名	根本康弘								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2017(平成29)年3月17日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
五蔵遺跡	茨城県土浦市大岩 田1,599番	08203 1 113	36度 3分 19秒	140度 12分 48秒	22 ~ 23m	20150105 ~ 20150131	330㎡	県立土浦第三 高等学校老朽 校舎改築事業 に伴う事前調 査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
五蔵遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴		3基		縄文土器(深鉢)		
	古墳	古墳	土坑 溝跡		1基 1条		土師器(坏・高坏・壺・甕)、 須恵器(坏)、土製品(土玉・ 管状土錘)		
	その他	時期不明	土坑		2基		瓦		
要約	当遺跡は、縄文時代と古墳時代の複合遺跡である。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Home Premium ServicePack1
編集		Adobe InDesign CS6
図版作成		Adobe Illustrator CS5
写真調整		Adobe Photoshop CS6
Scanning		EPSON ET-X980 図面類 RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第423集

五蔵遺跡 2

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年 3月15日 印刷

平成29（2017）年 3月17日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 佐藤印刷株式会社

〒310-0043 水戸市松が丘2丁目3-23

TEL 029-251-1212